

TAC 制度下における漁業資源評価と資源管理に関する研究 2

マグロ類・カジキ類(日本周辺高度回遊性魚類資源対策調査)

由木雄一・石田健次・安木 茂・沖野 晃*

1. 研究目的

マグロ類とカジキ類を科学的データに基づいて管理し、安定的に利用するため、本種の生態と漁獲実態を明らかにする。本研究は国および関係各県の協力の下に実施されるが、本県はマグロ類、カジキ類の漁獲統計資料の収集とクロマグロの生物測定を行う。

2. 研究方法

(1) 漁獲統計調査

主要 6 港(浜田・五十猛・大社・北浜・恵曇・浦郷)に水揚される、マグロ類およびカジキ類の漁獲統計資料を整理した。クロマグロについては銘柄別(まぐろ:体重 20 kg 以上、よこわ:体重 20 kg 未満)に分類し、まぐろは尾数と体重の集計を行い、よこわは平均体重から総尾数を推定した。

(2) 生物測定調査

浜田港および五十猛港において、クロマグロ、コシナガ、キハダの尾叉長と体重の測定を行った。

3. 研究結果

(1) 漁業の概要

本県で漁獲されるマグロ類の大半はクロマグロであるが、コシナガの漁獲量も 1996 年以降急激に増加しており、最近ではマグロ類全体に占める漁獲割合が約 5% となっている。その他のマグロ類では、キハダ、ピンナガ、メバチが漁獲される。カジキ類はバショウカジキ、メカジキ、マカジキ、クロカジキ、シロカジキが漁獲されるが、バショウカジキが全体の約 85% を占めている。

本県におけるマグロ・カジキ類を対象とした漁業には、まき網、釣、定置網がある。年変動があるものの漁獲割合は、まき網が約 80~85%、次に釣が 10%、定置網が 5% 前後となっている。特に近年は大中型まき網による漁獲割合が増加傾向にある。

(2) 2002 年の漁況(主要 6 港における漁況)

2002 年の主要 6 港におけるクロマグロの漁獲量は 627 トンで、前年の 47%、平年の 107% であった。内訳は 99.6% がよこわで 625 トン、まぐろは 2 トンであった。まぐろの漁獲は全体の 85% が定置網、15% がまき網によるもので、定置網は 5~7 月に、まき網では 4 月と 9 月に漁獲された。漁獲されたまぐろは体重 20 kg から 243 kg であった。よこわは周年漁獲されたが、そのピークは 6、7 月と 11 月であった。6、7 月は主にまき網で、11 月はまき網と釣で漁獲された。漁業種別の漁獲割合は、まき網が 93.4%、釣が 6.4%、定置網が 0.2% となっている。その他のマグロ類としてはコシナガ(尾叉長 32~52 cm)が 45 トン、キハダが 0.3 トン、ピンナガが 0.4 トン漁獲された。カジキ類は定置網を中心に 42.9 トンが漁獲された。そのうち、バショウカジキが最も多く 37.4 トンであった。

4. 研究成果

調査結果は日本 NUS を通じて水産庁に報告され、資源評価の基礎資料として利用された。また、平成 14 年度日本周辺高度回遊性魚類資源対策調査年度末検討会で報告された。

* 島根県栽培漁業センター